

## 嘉摩三作と道仏二教の父母恩重經

——憶良作品の思想的基調をめぐって——

増尾伸一郎

はじめに

神龜五(七二八)年七月二日、筑前国守山上憶良は、  
八天離る鄙<sup>1</sup>筑紫で客死した大宰帥大伴旅人の妻・郎女  
追悼のため、詩文と「日本挽歌」と題する長歌および反  
歌五首を旅人に献呈したその日に、「令反感情歌」「思子  
等歌」「哀世間難住歌」を撰定している。ともに序・長  
歌・反歌から成り、構成・内容についても緊密な連関を  
もつ作品で、一連の三作と見做され、歌人憶良の画期  
を示す。

この三作は、国守の職務である部内巡行の途次に嘉摩  
郡下で完成をみたことから、製作の契機を「戸令」国守  
遣行条の主旨の実践に求める窪田空穂・土屋文明氏等の  
説もあるが<sup>1</sup>、やはり、そうした外面的な要因だけにとど

まらない憶良自身の旺盛な表現意欲の結実として、内面  
に即した把握をすべきであろう<sup>2</sup>。

その点、三作の主題はそれぞれ、塵俗の煩惱を解脱し  
得ぬ八感情<sup>2</sup>と、その煩惱の最たる子への八愛<sup>2</sup>、そし  
て老いと死への苦悩からくる八無常<sup>2</sup>にあり、全体が仏  
教的な八惑<sup>3</sup>で彩られている、とする中西進氏の分析は  
示唆に富む<sup>3</sup>。

憶良の作品が諸種の經典を前提とすることは、契沖  
『代匠記』以来、諸家によって詳論されてきた通りで、  
この三作については殊に『涅槃經』との関連が深い、と  
される<sup>4</sup>。だが、最近、東茂美氏が六朝仏教の動向を視野  
におきつつ指摘されたように、經典を析出し得る作品が  
必ずしもそれだけに依拠するわけではなく、その他の儒  
教・道教等の要素を包摂していることにも注目する必要

がある。(6) そのような視点に立つ論考として村山出氏の「憶良——「世間苦」の文学における「子等」——」は重要である。(7) 村山氏は、三部作の第二作「思子等歌」をとりあげて、六朝から隋唐における、主に儒仏二教の思想・教義・倫理の上での対立と習合の所産である『仏説孝子経』や『仏説父母恩重経』の一節と対比しつつ、憶良における儒教と仏教の位相を考説された。

本稿では、これらの先論に示唆をうけながら、道仏二教、とくに従来ほとんど注目をひくことがなかった道教の父母恩重経と三部作全体との比較を通じて、憶良作品の思想的基盤としての儒仏道三教の在り方と三部作の性格を試考してみたいと思う。

## 一

或ル人、父母ヲ敬フコトヲ知りテ、侍養ヲ忘レ、  
妻子ヲ顧ミズシテ、脱履ヨリモ軽ニシ、自ら倍俗先  
生ト称ク。意気ハ青雲ノ上ニ揚ガレドモ、身体ハ猪  
シ塵俗ノ中ニ在リ。未ダ得道ニ修業スルノ聖ニ驗ア  
ラズ、蓋シコレ山沢ニ亡命スル民ナラムカ。所以ニ  
三綱ヲ指示シ、五経ヲ更メ開キ、贈ルニ歌ヲ以テ  
シ、ソノ惑ヒヲ反サシム。歌ニ曰ク、

父母を見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し

世の中は かくぞことわり もち鳥の かからはし  
もよ 行くへ知らねば うけ齋を 脱き棄るごとく  
踏み脱きて 行くちふ人は石木より 生り出し人か  
汝が名告らさね 天へ行かば 汝がまにまに 地  
ならば 大君います この照らす 日月の下は 天  
雲の 向伏す極み たにぐくの さ渡る極み 聞こ  
し食す 国のまほらぞ かにかくに 欲しきまにま  
に 然にはあらじか (八〇〇)

### 反歌

ひさかたの 天路は遠し なほなほに 家に歸りて  
業をしまさに (八〇一)

第一作の「惑ヘル情ヲ反サシムル歌」の序において、憶良はまず「倍(畏)俗先生」という人物を措定する。系累を顧みないまま、独り軒昂として得道に志してはいるものの、未だ験術を悟達するには到らず、「塵俗ノ中」に留まっているからには「山沢ニ亡命スル民」であろうか、という。

「山沢亡命」に関しては「賊盜律」謀叛条に規定され、『続日本紀』慶雲四(七〇七)年七月一七日条の大赦令以下、随所にみえる文言であることは諸注の指摘する通りである。

過重な調庸物貢納の負担に疲弊し、課役を忌避する浮

浪・逃亡者が急増しはじめたのは、平城京造管が進められた和銅年間前後からで、その多くは王臣家に仕えて資人になることを望み、あるいは得度を求めたが、中には、「其ノ居精舎ニ非ズ、行練邪ニ乖キ、意ニ任セテ山ニ入り、輒ク菴廬ヲ造ル」<sup>(10)</sup>のような、いわゆる私(自)度の沙弥も少なくなかった。

行基とその集団の宗教活動を統制した養老元(七一七)年四月二三日の詔には、「街衢ニ零量シテ安リニ罪福ヲ説ク。朋党ヲ合セ構へ、指臂ヲ焚キ剝ギ、歴門仮説シテ、強テ餘物ヲ乞ヒ、詐テ聖道ト称シテ、百姓ヲ妖惑ス。道俗擾乱シテ、四民業ヲ棄ツ」云々とあって、彼らの教法がかなり呪術性に富むことを示唆する。長屋王事件直後の神亀六(天平元(七二九)年)四月三日に出された勅では、「山林ニ停住シ、詳ツテ仏法ヲ道ヒ、自ラ教化ヲ作シテ伝習シテ業ヲ授ケテ書符ヲ封印シ、薬ヲ合セ毒ヲ造リ、萬方怪ヲ作ス」といい、同時に「内外ノ文武百官及ビ天下ノ百姓」に対しても「異端ヲ学習シ、幻術ヲ蓄積シ、厭魅呪咀シテ百物ヲ害傷スル」行為を厳禁している。僧尼が「小道巫術」によって治療行為を施すことを禁じた「僧尼令」ト相吉凶条の規定などからも、多分に道教的な性格の呪法が、かなり広く浸透していたことが推測されよう。

とすれば、井村哲夫氏が『日本霊異記』上巻二八話の役小角と較べつつ論じられたように、「倍(畏)俗先生」の風貌には、仏教徒というよりも神仙的な方術まがいの呪術者としての面影が認められる<sup>(11)</sup>。

民間における私度僧たちの布教活動への統制に厳しさを加えた八世紀前半、とくに養老・神亀から天平初年にかけての社会状況の中で、このような立場をとらざるを得なかった人々に対する憶良の眼差しは、最晩年の天平五(七三三)年に成った「沈痾自哀文」にも端的に窺い知られる。老いて病む身の苦悩と生への希求を叙述したこの詩文では、「若シ夫レ群生品類、皆尽クルコトアル身ヲ以テ、並ニ窮ミナキ命ヲ求メズトイフコト莫シ。所以ニ、道人方士、自ラ丹經ヲ負ヒテ名山ニ入りテ薬ヲ合スルハ、性ヲ養ヒ神ヲ怡ビシメテ、長生ヲ求ムナリ」という一節に集約されるように、述作の拠り所とした『抱朴子』の本質は八生の欲望の浄化にあると理會し、道人方士への共感を深めている憶良であってみれば、「倍(畏)俗先生」は憶良自身の観念的な分身として把えることができる<sup>(12)</sup>が、この序では、そうした「倍(畏)俗先生」に対して「三綱ヲ指示シ、五経ヲ更メ開キ、贈ルニ歌ヲ以テシ、ソノ惑ヒヲ反サシム」といい、儒教倫理を呈示することによって、その八惑Vを覚醒させようとする形をとる。

続く長歌の冒頭部、「父母を見れば尊し」から「行くへ知らねば」まででは、序文をうけて、父母・妻子をいとおしむことが八世間の道理<sup>（モトワ）</sup>であり、そうした情愛からは容易に離れ難いことをいう。中段の「うけ沓を」から「汝が名告らさね」までの部分、とくに「石木より生り出し人か」は、『抱朴子』対俗篇の一節「妻子ヲ委棄シ、独り山沢ニ処シ、邈然トシテ人理ヲ断絶シ、塊然トシテ木石ト隣ヲ為スハ多トセザルトコナリ」を前提とする<sup>（16）</sup>。対俗篇には「仙ヲ求メント欲スル者ハ忠孝和順仁親ヲ以テ本トナスベシ。若シ德行ヲ修メズ、而シテ但務メテ玄道ヲ求ムルモ益ナキナリ」あるいは、「蓋シ聞ク、身体ヲ傷ケザル、コレヲ終孝トイフ。況ヤ仙道ヲエテ長生久視シ、天地ト相畢ランニハ全ヲウケ、完ニ帰スルニ過グルコト亦遠カラズヤ」などもあり<sup>（16）</sup>、秋月観映氏のいわれるように、少なくとも四世紀・晋代の『抱朴子』においては、まだ道士の八出家は否定的に扱われ、仙道の修業と孝養を尽くすこととは互いに矛盾しないばかりか、かえって孝道の実践が得道の要件であって、むしろ得道こそが世俗的な意味における八孝の最たるもの、という立場をとるようである<sup>（17）</sup>。

「天へ行かば」以下の後段では、「青雲の靄く極み 白雲の墮り坐 向伏す限り」「谷蟻のさ渡る極み」という

祈年祭祀詞の詞章をふまえつつ、「大君います」「日月の下」すなわち王権のもとに統率された世界に生きる民としての自分を説き、最後の反歌で、その意図はさらに明確に表現される。

村山出氏の評言に従えば、この作品は、「塵俗の中」にあって、家族貧愛の情に捉われるのが八惑であるとはいえず、家族を現実苦の中に残して独り王土の外に逃れようとするのは、八惑からの脱却を志しながら、さらに深い八惑に捕われている、という認識に憶良が立つことを示すものといえよう<sup>（18）</sup>。

憶良には、漢詩文と歌によって構成される作品が少なくないが、漢文序において志を述べ、長歌で人間苦を叙事的に詠じ、反歌はその帰結や理念を歌うのが基本的な構造であるとされる<sup>（19）</sup>。この「令反感情歌」もまさにそうした形態をとるが、同時に、三部作の第一作にあたって、全編の総序としての位置をも併せ持つとみてよいだろう。

## 二

仏教は中国伝来の当初から、その出家主義や不拜君親主義などのために、主として儒教の側から反倫理・反社会的な教説として論難され続けてきたが、それへの対応<sup>（20）</sup>

として、仏教における「孝」の在り方を問う、いわゆる孝経典の翻訳も早くから進められた。

梁の天監一七(五一八)年までに成立した僧祐撰の『出三蔵記集』<sup>(21)</sup>には、すでに『仏昇切利天品経』二卷<sup>(22)</sup>、『大六向拝経』一卷<sup>(23)</sup>、『孝子報恩経』一卷<sup>(24)</sup>、『大方便報恩経』七卷<sup>(25)</sup>、『孟蘭盆経』一卷<sup>(26)</sup>、『父母恩難報経』一卷<sup>(27)</sup>その他が著録されているが、これらの諸経典においては、儒教的・世俗的な孝養は全く否定されないまでも著しく輕視され、専ら仏教のあるいはインド的な倫理観に基づく孝養の実践とその救済が強調される傾向が顯著であるといわれる<sup>(28)</sup>。

これに対して、『孝子経』や『父母恩難報経』あるいは『孟蘭盆経』などに拠りつつ中国で撰述されたと思われる『仏説父母恩重経』では、仏教的な孝恩よりも、むしろ儒教のあるいは世俗的な孝道の実践に所説の重点を置く<sup>(29)</sup>。

『仏説父母恩重経』(以下、『仏説恩重経』と略記)の初見は、則天武后の天冊万歳元(六九五)年に成った『武周刊定衆経目錄』卷一五<sup>(30)</sup>であり、唐初の成立かと推測されているが、程なく日本にも請求されたらしく、天平一九(七四七)年一月七日の正倉院文書には、『金剛般若経』や『文殊師利涅槃経』等と並んで、「父母恩重経 一卷」

とみえる<sup>(31)</sup>。

『仏説恩重経』には異本が多く<sup>(32)</sup>、現行の「大正新脩大蔵経」所収の敦煌本が<sup>(33)</sup>、『武周録』に著録されたものと同一系統かどうかにも問題が残るようであるが、そのことは同時にこの経典が広く流布したことをも物語る。

大宝二(七〇二)年に、粟田真人を執節使とする遣唐使の一行に「少録」として随行した憶良が、在唐生活の中で、本格的な仏教経典とは性格の異なるいわゆる偽疑經典類<sup>(34)</sup>にも関心を寄せたであろうことは、『沈痾自哀文』において『抱朴子』や『遊仙窟』の他に、『志怪記』や『寿延経』、『帛公略説』、『鬼谷先生相人書』などの、道教的色彩の濃い偽経類を随所に引用することから推察され<sup>(35)</sup>、『仏説恩重経』にも接した可能性は高い。だが、ここで注目したいのは、道教の側にもこれときわめて類似した経典が存在することである。

道教経典を集成した「道蔵」洞神部本文類所収の『太上老君説法父母恩重経』<sup>(36)</sup>(以下、『老君恩重経』と略記)は、西那玉国鬱利山中において、太上老君が五万人にのぼる聴衆を前に、道德・科戒を宣暢した際、会衆の一人である海空智蔵という真人が「臣等髮膚ヲ稟受スルハ皆父母ニ由ル。父母ノ恩深キモ効ニ報ユルニ由ナシ」と述べて報恩の方法をたずねたのに答えて、太上老君が説法を示

す形式をとる、多彩な内容の經典である。

儒教の『孝經』を強く意識した經典が、仏教と同様に、道教の側においても撰述されたことの背景には、先の『抱朴子』などにみられるような、仙道の修行と孝道の実践との間に、さほどの矛盾が認められなかった晋代とは異なって、六朝末から隋唐になると、道士の禁欲的な戒律がしだいに強化され、道士・女官には僧尼と同様に不聚・不妻の制が強調されて、出家者として扱われるようになったことから、彼らに世俗的な孝道の実践を課すような従来の道教の姿勢は必然的に転換を余儀なくされた、という政治・社会的な動向が作用しているようである。<sup>(37)</sup>

この經典の成立年代も明確ではないが、鎌田重雄氏の所説によると、他に真人「海空智藏」の名を見出せる数少ない史料『太上一乗海空智藏經』十卷が、顕慶三（六五九）年に始まった仏道論争の直後に、仏教の唯識説に對抗するために道教側の偽作した經典とされているので、それをさほど下らぬ時期に成ったとみてよさそうである。

そこで問題となるのは、唐初に前後して成立したらしいこの二經の先後関係であるが、秋月鶴映氏によれば、『大正新修大藏經』所収の敦煌本『仏説恩重經』には、

後世の錯簡、誤脱、竄入等が少なくないことから、断定は出来ないものの、現行の道藏本『老君恩重經』と較べた場合、『老君恩重經』の方がやや先行し、『仏説恩重經』は、これを剽窃、模倣した形迹がいくつか認められる、という。<sup>(40)</sup>

このような儒仏道の三教の相剋を背景とする道仏二教の父母恩重經の成立をめぐる事情は、憶良の三教に亘る思惟に基づく嘉摩三部作の問題を考える上に、ひとつの視点を提起し得るものと思われる。

以下、次章では主として『老君恩重經』に拠りながら、「思子等歌」の内容との比較を試みたい。

### 三

釈迦如来、金口ニ正シク説キタマハク、「衆生ヲ等シク思フコト、羅睺羅ノゴトシ」ト。マタ説キタマハク、「愛シビハ子ニ過ギタルトイフコトナシ」ト。至極ノ大聖スラニ、ナホシ子ヲ愛シビタマフ心アリ。況ヤ、世間ノ蒼生、誰カ子ヲ愛シビザラメヤ。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲ばゆ  
いづくより 来りしものぞ まなかひに もとなか  
かりて 安眠しなさぬ (八〇二)

反歌

銀も 金も玉も 何せむに 優れる宝 子にしかめ  
やも (八〇三)

第二作「子等ヲ思フ歌」の序では、釈迦の言説を引きながら、子をいとおしむ煩惱の避け難いことを述べる。

憶良が引いた「衆生ヲ等シク思フコト、羅睺羅ノゴトシ」という章句の出典として、契沖『代匠記』は「普観ニ衆生ニ愛無ニ偏党ニ如ニ羅怙羅ニ」とある『金光明最勝王經』如来寿量品を、また小島憲之氏は「等観ニ衆生ニ、如ニ羅睺羅ニ」とある『合部金光明經』寿量品を挙げられた。<sup>(41)</sup>しかし、これらの経典にみる限りでは、この句は憶良の序にいうような釈迦自身のものではなく、一婆羅門が仏を礼拝した際の言葉であることから、「等視ニ衆生ニ如ニ羅睺羅ニ」の章句が釈迦自身の口から発せられ、世に光彩を放ったという『大般涅槃經』第一寿命品に拠る、とされるのは井村哲夫氏である。<sup>(42)</sup>

この文末は、本来「一切衆生皆是吾子」という、如来が衆生の救済を願って示すハ法愛Vを、親の子に対する愛という形で比喩的に表現したものであるが、それを憶良が敢えて、釈迦ですら、その子羅睺羅への慈愛は断ち難かった、というハ欲愛Vと解したのは、親が子への愛情に捉われることの真実を釈迦の言句によって肯定し

ようと意図したことによるのだろう。

続く「瓜食めば」と「銀も」の二首の歌は、それをうけて在るべき愛の姿を示したものとみられ、一編を通じての主題は、やはり井村氏や大久保広行氏が論じられたように、盲目的に子どもに執着して止まぬ親の愚かしいまでの苦悩を孕んだ姿、にあるといえよう。<sup>(43)</sup>

そうした愛の在り方を憶良が描き得たことについては、諸方面からの考察が試みられているが、<sup>(44)</sup>ここでは『老君恩重經』の中に、その契機的一端をさぐってみたいと思う。

全一三七行から成る『老君恩重經』は、ほぼ十節に分けることができる。中心は、海空智蔵の問いに対する太上老君の説法の部分にあり、第二節から第六節に及ぶ。第二節では、先ず孝と不孝に關して、

若シ、孝悌ナレバ、一家ノ中、老少安楽シ、天人  
欽仰シ、神明守護シ、子孫相ヒ承ケ、孝慈ナルコト  
断タレズ、孝順ヲ招感シ、以テ其ノ子ト為ス。若シ  
孝ナラザレバ、世世相ヒ継グニ、一門ノ内、総ベテ  
是レ寃ノ家ナリ。父子為リト雖モ、讎敵ヨリ甚シ  
ク、五逆ヲ召キ、以テ其ノ兒ト為ス。

と述べ、愛情に満ちた家庭の生活を示して、孝と不孝、

とくに不孝が係累に及ぼす影響を説いた後、

諸ノ不孝ノ縁、共ニ父子ト為リ、更ニ相ヒ残害シ、死生憂苦シ、輪転窮マル無ク、天下ノ苦痛、此ニ過グル莫シ。

と結ぶ。

第三節からは、親子の絆をめぐって詳密な説法が展開され、聴衆の中の不孝の子に対して自ずから回心を促すような構成をとる。

懐妊した母親の不安と出産の苦痛、生まれてきた子どもへの愛情、養育の悩みと喜び、そして幼な児のしぐさなどの様子を、情趣豊かに叙述する本節は、最も生彩に富む核心部であるので、いささか長きにわたるが、以下全文を引く。

夫レ人、世ニ生マルルハ、父母、親為レバナリ。父ニ非ザレバ生マレズ、母ニ非ザレバ養ハズ。是ヲ以テ、天地覆陰シ、母胎ニ寄託シ、氣識相ヒ凝リ、懷娠スルコト十月ニシテ繁妊、胞重タリ。

坐臥スルニ常ヲ失シ、歳満チ月充チテ、誕育ノ候ナレバ、其ノ母、恐怖シ、性命儼然トシテ惻怛タリ、心神、憂喪ス。

産孕ノ日、内触外触シ、苦痛交々切ニシテ、声ヲ失シテ号叫シ、大苦惱ヲ受ケ、匍匐戰懼シテ、駭愕

驚嗟ス。生ミテ己ハルニ至ルニ及ビ、手ズカラ其ノ頂ヲ摩デ、草上ニ墮ロシ、呱呱トシテ号啼スレバ、被褥ニ安ス。

側身スルコト三月、常ニ邪魔ノ侵害スル所ヲ畏ル。飢ウル時ハ須ラク飯セシムベキモ、母ニ非ザレバ哺メズ。渴ク時ハ須ラク飲マシムベキモ、母ニ非ラザレバ乳セズ。母乳ヲ飲ムヲ計ルニ八斛四升、千日提携シテ、塵垢ヲ遮蓋シ、推シテ湿ニ就カシメ、苦ヲ嚙ミテ甘ヲ吐ク。義ニ非ザレバ親ナラズ、母ニ非ザレバ養ハズ。

忽トシテ欄車ヲ離レ、地上ニ出ツレバ、十指ノ爪中、食子不浄ナリ、母或ハ東西シテ、隣里ニ確磨シ、官私急切ナレバ、時ノ還ルヲ得ザルモ、即チ我が児ノ家中ニテ啼哭スルヲ知ル。母子、天親ナレバ、心性相ヒ感ジ、母ト百骸ヲ分ケテ両身ヲ為スモ、氣血相ヒ伝ハリ、両体無二ナリ。児、既ニ母ヲ憶ハバ、母、即チ心驚シ、馳歩シ、走帰ス。両乳湧出シ、還リテ門外ニ到ルニ、子ヲ庭中ニ見ル。或ハ欄車ニ在リ、或ハ房門ノ際ナリ。或ハ人ノ抱ク有り、或ハ人ノ抱ク無シ。或ハ牀ノ上ニ在リ、或ハ地下ニ在リ。或ル時ハ不浄ニ坐シ、或ル時ハ泥草ヲ把ミ、或ハ尚、啼哭セントシ、或ハ啼哭止メント欲



ス。眼ヲ挙ゲテ母ヲ見テ啼笑嘘嚙シ、頭ヲ揺ラシ腦ヲ弄シ、腹ヲ曳キテ行キ、嗚乎嗚乎シテ哀レミ其ノ母ニ向フ。母乃チ児ノ為ニ身ヲ屈メテ下就シ、兩手ヲ長舒シ、不淨ヲ拭除シ、其ノ口ヲ吹嘘シテ、乳ヲ以テコレニ与フ。舍孔、母ヲ看テ、其ノ声ヲ嚙嚙トス。母、児ヲ見テ喜ビ、児、母ヲ見テ喜フ。二情思想シ、慈愛親重、情親ノ相念ジタルコト、此ニ過グル莫シ。

第四節では、成長しはじめた子供が、しだいに我まを覚えるのに対し、子に不自由をさせまいとする両親は弊衣粗食に甘んじて育児にあたる。

二歳三歳ニシテ、弄意始メテ行ナハル。寒熱、尿管、母ニ非ザレバ悉クサズ。笑フ時、喜ヲ懷ヒ、啼ク時、嘯ルヲ知ル。唯ダ飲食ヲ楽シミ、余ル所、願フコト無シ。

父母、行来シ、他ノ酒座ニ値ハバ、或ハ餅肉ヲ得ルモ、敢ヘテ食セシメズンバアラズ、懷挾シテ將チ帰リ、其ノ子ニ向与シ、十回九回、恒常ニ歡喜ス。

この部分にみられる親の子への想いは、「瓜食めば」の歌にそのまま通じるように思われる。

第五節では、結婚した子供が両親を疎略にし、老いた父母は子の不孝と我が身の孤独を嘆き、第六節では、再

び第三・四節に重ねて、母親が出産と育児の労苦を回想しつつ、子に対して慨嘆そして哀訴するが、その一節、

万種ノ福ヲ求ムルコト、黄金、白銀、衣服、玩具ハ心ニ子ノ可シキヲ念ジテ、吝惜スル所無シ。

ただ子供がいと嬉しい一心で、黄金も白銀も何も惜しみはしなかった、というこの章句は、金銀玉と較べても子にまさるものは無い、という憶良の反歌とはやや意趣を異にするとはいへ、何らかの連関があるのではなからうか。

ここに描写された親子の像は、道端良秀氏が『仏説恩重經』について指摘されたのと同様に、士大夫や知識層に属する人々ではなく、日々労働に明け暮れる一般の民衆であり、先行の孝経典類とは異な<sup>(45)</sup>って、広く衆庶を対象とする点に独自性がある。

憶良もまた、これと同一の発想と視点に立つと、よく、そのことは、次の第三作においても看取されよう。

#### 四

集マルコト易ク排フコト難キハ、八大ノ辛苦、遂グルコト難ク尽クルコト易キハ、百年ノ賞楽ナリ。古人ノ嘆クトコロ、今モマタコレニ及ブ。所以ニ因

リテ一章ノ歌ヲ作りテ、二毛ノ嘆キヲ撥ハム。ソノ歌ニ曰ク。

反歌

常磐なす かくしもがもと 思へども 世の理なれば 留みかねつも (八〇五)

世の中の すべなきものは 年月は 流るるごとし  
とり続き 追ひ来るものは 百種に せめ寄り来る  
娘子らが 娘子さびすと 韓玉を 手本に巻かし

三部作最後の「世間ニ住ミ難キコトヲ哀シブル歌」は、その序に「一章ノ歌ヲ作りテ、二毛ノ嘆キヲ撥ハム」とあるように、△老Vを主題とする。

(或るはこの句あり、云はく、「白たへの袖振りかはし紅の赤裳裾引き」) よち子らと 手携はりて 遊びけむ  
時の盛りを 留みかね 過ぐしやりつれ 蝨の腸  
か黒き髪に 何時の間か 霜の降りけむ 紅の (一に云ふ、「丹のはなす」) 面の上に いづくゆか 皺が  
来りし (一に云ふ、「常なりし 笑まひ眉引き 咲く花のうつろひにけり 世の中は かくのみならず) ますらをの 男さびすと 剣大刀 腰に取り佩き さつ弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き 這ひ乗りて 遊びあるきし 世の中や常にありける 娘子らが さ寝す板戸を 押し開き い辿り寄りて ま玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜の いくだもあらねば 手束杖 腰にたがねて か行けば 人にとはえ かく行けば 人に憎まえ 老よし男は かくのみならず たまきはる 命惜しけど せむすべもなし (八〇四)

長歌の冒頭では、年月の流れ去る早さと、避け難い△老Vと△病Vの果てに△死Vが近づいてくることを嘆く。それに呼応する後段の「手束杖 腰にたがねて か行けば 人に厭はえ かく行けば 人に悪まえ 老よし男は かくのみならず」という△老醜Vの叙述は、中段に、それぞれ「娘らが 娘さびすと」、「ますらをの 男さびすと」と語り起こされる若さに満ちた世代の風姿とは際立った対照を見せる。そして末尾の「たまきはる 命惜しけど せむすべもなし」という諦観が結びの反歌を導く。

このような△老Vの無常は『老君恩重経』において、子に背かれた親の立場から縷述されている。先述のように第五節では、老いた親が、結婚した子供に疎んぜられることを嘆くのだが、老いた両親の身辺は寂しく、

父母年老ヒ、氣力漸ク衰フ。朝ヲ終へ、暮ニ至ル

マデ、来リテ省問セズ、独リ空房ヲ守リ、猶ヲ外客ノ如シ。少衣少食ニシテ飢凍ハ身ニ切ナリ。手脚臍臍シ、耳聾タリ、眼ハ暗シ。单床、飄薄ニシテ日ヲ度リ年ヲ如ス。

身、既ニ疳蠱タリテ、多ク蟻虱ヲ饒シ、蚊虻、体ヲ嗜ス。夕ヲ通ジテ寝ネズ、長ラク吟ジ、嘆息スラク。「何ナル罪ノ有リテカ、此ノ不孝ノ子ヲ生ズルヤ」ト。杖ニ柱ヘラレテ巡喚シ、頭ヲ低レテ氣ヲ下シ、欠クル所ヲ伸バサント欲シテ、未ダ前言ヲ尽サザルニ、其ノ児、声ヲ興コシ目ヲ瞋ラセテ罵詈ス。頭ヲ回ラシテ却退シ、壁ニ扶ケラレテ帰リ、胸ヲ捶チテ自ラ非リ、流動シテ目腫レ、声ヲ連ネテ苦ヲ唱フラク、「早く亡ヌニ如カズ」ト。

て、  
というように、親と子の懸隔は深まるばかりであつて、  
△死△をすら考える親の絶望感は、第六節の末尾におい

今、汝有リト雖モ、本ヨリ無キニ如カズ。コレヲ天ニ付サバ、幽冥、当ニ鑑ルベシ。願ハクハ我ヲシテ早く過カシメ、你ト相ヒ離レンコトヲ。奈何セン、奈何セン。

とも語られる。

子の養育を全てに優先させ、日々の生活を維持するこ

とに汲々としてきたこれまでの歳月とは、一体何だったのか。「哀世間難住歌」と『老君恩重經』の両者における△老△の描写には、相い通じる部分も多く、その孤独感と嗟嘆の基調は、ほぼ同質のものともてよかるう。

『老君恩重經』における太上老君の長い説法は、この第六節までで一區切つけられるが、次の第七節では、一転して神変により眼前に地獄を顕現させる。

地獄ノ内ニ、無数ノ衆生アリテ、足、刀山ヲ踐ミ、手、劍樹ニ穿タレ、其ノ舌ヲ拔出セラレ、鉄柱、コレヲ刺シ、酷痛、号哭シ、身体膿爛シ、毛孔ノ内、悉ク皆血ヲ流シ、大小狼籍タリテ、楚毒ヲ流曳ス。

というような不孝を犯して苦しむ人々の姿を前に、再び海空智蔵に向つて、

斯ノ罪人タルヤ、生ケルトキ慈孝ナラズ、父母ヲ違棄シ、三宝ヲ誹謗シ、出家ヲ侮慢セリ。今ノ報ヲ受クルコト、塗炭、何ゾ極マラン。日趣クコト長遠ナルモ、如何トモスベキ無シ。

と訓誡する。次いで第八節では、

天堂ノ内ニ、善男善女等、威儀、庠序トシテ、容ヲ華ニシテ挺出ス。天厨ノ百味、珍玩ナルコト、窮

マル者有ル無く、形ヲ恣ニシテ、妍盛タリテ、娼  
楽、自在ナリ。

と天堂(天国)の模様が現出し、今度は、

此ノ人、生キテヲリシ時、至心慈孝ナリ。父母ヲ  
供養シ、三宝ヲ礼敬シ、布施シ、戒ヲ持シ、出家ヲ  
信重ス。今、福慶ヲ受ケテ、果報、窮マル無シ。  
と述べて、孝子に対する果報にふれ、さらに重ねて、

前縁ニ至リテ孝慈ニシテ、供養シ、礼シテ、違フ  
ナシ。三宝ヲ敬信シタレバ、期無く、福カナラズ掃  
サン。天堂ノ裏ニ容曳セラレテ、福祉ノ高キコト魏  
々タリ。斯ノ楽ハ、今、極マル無く、由来、福慶隨  
ハン。

という偈を説く。

続く第九節では、その太上老君自身にとつてすら、父  
母の恩に報いて孝養を尽くすことはいかに困難かが語ら  
れ、最後に、既に亡くなった両親への追善や、これまで  
の不孝への償いの方途として、写経、読誦、受持、焼  
香、設齋その他を教唆して、この経巻は終る。

### おわりに

以上のような構成と内容をもつ『老君恩重経』は、村  
山出氏が『仏説恩重経』などの仏教の孝子経についてい

われたように、やはり、深い宿縁による親と子が、親の  
子に対する慈愛と養育、および子の親に対する報恩と孝  
養という、相互の敬愛、すなわち八孝<sup>(47)</sup>によって結ばれ  
ていることを説く經典の一つではあるが、子への愛に捕  
捉されて、全てを賭ける親の歓喜、悲哀、そして苦悩  
を、きわめて鮮やかに微細に描き出した点において傑出  
しており、憶良の三部作とも契合する点が少なくないこ  
とは注目に値しよう。

儒教側からの論難に対応して、道教と仏教それぞれの  
立場から、『孝経』を強く意識しつつ撰述された『老君恩  
重経』や『仏説恩重経』は、中国における儒仏道三教の  
長く厳しい相剋の歴史の所産に他ならないが、在唐経験  
を通じてその本質を、これらの經典が創出されてくる過  
程の中に明確に把握した上で、同様の発想のもとに、律  
令制下の民衆生活の現実素材を求め、三教に亘る独自  
の思惟を凝らして造形したのが、憶良の嘉摩三部作なの  
ではなかったか、と思うのである。<sup>(48)</sup>

### △注▽

(1) 窪田空穂『山上憶良』(『万葉集講座』第一巻 一九三

二年 春陽堂)、土屋文明『万葉集私注』新訂版第三巻

(初版一九五一年 筑摩書房)。沢瀉久孝『万葉集注釈』

卷第五もこれに従う。

- (2) 中西進「嘉摩三部作」(『山上憶良』一九七三年 河出書房)、井村哲夫「令反感情歌と哀世間難住歌」(『憶良と虫麻呂』一九七三年 桜楓社)、村山出「感情を反さしむる歌」(『万葉集を学ぶ』第四集 一九七八年 有斐閣)。大久保広行「子等を思ふ歌」(同前)、林田正男「世間の住み難きことを哀しむる歌」(同前)、下田忠「令反感情歌の構造」(『山上憶良長歌の研究』一九八一年 桜楓社)など。
- (3) 中西進、前掲注(2)。
- (4) 小島憲之「山上憶良の述作」(『上代日本文学と中国文学』中巻 一九六四年 塙書房)、古沢未知男『漢詩文引用より見た万葉集の研究』(一九六六年 桜楓社)をはじめ、近年では、芳賀紀雄氏の、「理と情―憶良の相剋」(『万葉集研究』第二集 一九七三年 塙書房)、「山上憶良―子らを思ふ二つの歌―」(『国語国文』四四巻四号一九七五年)以下一連の論考が出典をめぐって詳細をさわる。
- (5) 井村哲夫、前掲注(2)、および同『万葉集全注』巻第五(一九八四年 有斐閣)。
- (6) 東茂美「六朝仏教からみた憶良歌の位置」(『上代文学』第五四号 一九八五年)および、同「渴愛―憶良「思子」歌一首并序」について―(『文学・語学』第一〇一号 一九八四年)。
- (7) 『万葉の歌びと』(上代文学会編 一九八四年 笠間書院)、および同『憂愁と苦惱 大伴旅人・山上憶良』(一九八三年 新興社)。
- (8) 以下、憶良作品の訓読は、主として日本古典文学全集版『万葉集』(一)小島憲之、木下正俊、佐竹昭広編著、一九七二年 小学館)に拠る。
- (9) 『続日本紀』養老元(七二七)年四月一七日条の詔。
- (10) 同前、養老二(七二八)年十月十日条。
- (11) 井村哲夫「山上憶良の作品」(前掲『憶良と虫麻呂』)。
- (12) 拙稿「『沈痾自哀文』の史的位置」(『史境』第八号 歴史人類学会 一九八四年)。
- (13) 村上嘉実「道教における欲望肯定の思想」(『六朝思想史研究』一九七四年 平楽寺書店)、同『抱朴子』(一九六七年 明德出版社)、および村山出「『沈痾自哀文』覚書」(『山上憶良の研究』一九七六年 桜楓社)。
- (14) 中西進 前掲注(2)、井村哲夫 前掲注(11)。
- (15) 小島憲之 前掲注(4)。
- (16) 石島快隆『抱朴子』(一九四二年 岩波文庫版) 参照。
- (17) 秋月観映「道教と仏教の父母恩重経」(『宗教研究』第一八七号 一九六六年)。
- (18) 村山出 前掲注(2)。
- (19) 村山出「憶良の生涯」(前掲『山上憶良の研究』)。
- (20) 中国における儒仏道三教の交渉史については、常盤大定『支那に於ける仏教と儒教道教』(一九三〇年初版、

- 一九八二年 原書房復刊)、吉岡義豊『道教と仏教』第一  
 一〇第三(一九五九〜一九七六年)をはじめ多数の論著  
 がある。筆者は、マックス・ウェーバー『儒教と道教』  
 (創文社版)、ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』  
 (第十章「道家と道教」、思索社)の訳注者である故木全  
 徳雄教授(筑波大学哲学思想学系)の六朝宗教史を中心  
 とする講義から教唆を得た。
- (21) 大正蔵経五五卷 No.二一四五。  
 (22) 同前 一七卷 No.八一五に『仏昇切利天為母説法經』  
 三卷(西普、竺法護訳)として現存。  
 (23) 同前 一卷 No.一六に『戸迦羅越六方礼經』一卷(後  
 漢 安世高訳)として現存。『仏説善生子經』ともいう。  
 (24) 同前 一六卷 No.六八七、西晋代失訳。『孝子經』と  
 もいう。  
 (25) 同前 三卷 No.一五六、後漢代失訳。  
 (26) 同前 一六卷 No.六六八、西晋竺法護訳。  
 (27) 同前 一六卷 No.六八四、後漢安世高訳。  
 (28) 秋月観映 前掲注(17)。  
 (29) 道端良秀『唐代仏教史の研究』(一九五七年 法蔵館)、  
 同『仏教と儒教倫理』(一九六八年 同前)、秋月観映  
 前掲注(17)。『仏説父母恩重經』については、禿氏祐祥  
 『父母恩重經和解』(一九四一年 森江書店)、中川善教  
 『讚父母恩重經』(一九四三年 私家版)、新井慧誉『恩  
 思想からみた「孟蘭盆經」と「父母恩重經」の関係』  
 (『仏教思想 4 恩』仏教思想研究会編 一九七四年平楽  
 寺書店)等参照。  
 (30) 大正蔵経 五五卷 No.二一三五。『武周録』とも。全  
 一五卷。卷一五には二二八部四一九卷にのぼる偽経目録  
 をのせる。  
 (31) 『大日本古文书』第二卷、「伊吉寺三綱牒」七一三頁。  
 なお石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』では  
 三一七頁と誤植。  
 (32) 禿氏祐祥『父母恩重經の異本に就て』(『宗教研究』新  
 五卷四号 一九二八年)によれば六種を数えるという。  
 (33) 大正蔵経 八五卷 No.二八八七。これは敦煌出土のス  
 タイン本二〇八四号、同一九〇七号と、中村不折旧蔵本  
 (現・書道博物館)を対校したもの。牧田諦亮『疑経研  
 究』(一九七六年 京都大学人文科学研究所刊)には、  
 ペリオ本二二八五号が翻刻されている。その他の敦煌本  
 については『敦煌遺書総目索引』(一九六二年 北京)  
 および小川貫式『大報父母恩重經の変文と変相』(『印度  
 学仏教学研究』第一三卷一号 一九六五年)、北村茂樹  
 『敦煌出土『父母恩重經講経文』の孝思想とその展開』  
 (川口久雄編『古典の変容と新生』一九八四年 明治書  
 院)等参照。  
 (34) 偽疑経典については、牧田諦亮、前掲注(33)参照。  
 (35) 菊池英夫『山上憶良と敦煌遺書』(『国文学 解釈と教  
 材の研究』第二八卷七号 一九八三年)では、類書「法

苑珠林」との関連が指摘されている。

(36) 道藏 洞真部本文類 女下(第三四五冊) 所収。

(37) 秋月観暎、前掲注(17)。「仏説恩重經」に関する論考は多数あるが、『老君恩重經』を評論したものはこの一編にとどまる。本稿でも多くの示唆を得た。

(38) 道藏 洞真部本文類 月上〜月下(第二〇〜二二冊) 所収。

(39) 鎌田重雄「唯識説の道教的改変」(『中国仏教思想史研究』一九六九年 春秋社)。

(40) 秋月観暎、前掲注(17)。

(41) 小島憲之、前掲注(4)。

(42) 井村哲夫「思子等歌の論」(前掲『憶良と虫麻呂』)および『万葉集全注』巻第五。

(43) 井村哲夫、前掲注(42)、および大久保広行、前掲注(2)。

(44) これまで注記したものの他に、阪下圭八「山上憶良における「子等」の問題」(『文学』第三五巻四号 一九六七年)など。

(45) 道端良秀、前掲注(29)。

(46) 中西進「憶良「少年行」」(『上代文学』第五三号 一九八四年)では、中国の「少年行」と題される作品群との対比から、この作品の性格が考究されている。

(47) 村山出、前掲注(7)。

(48) この三部作完成の五年後(天平五年)、最晩年を迎え

た憶良は、「悲嘆俗道仮合即離易去難留詩一首并序」に

において、儒教と仏教にふれ、「竊カニ以ミレバ、釈・慈ノ示教ハ、先ニ三帰五戒ヲ開キテ、法界ヲ化ケ、周孔ノ垂訓ハ、前ニ三綱五経ヲ張りテ、邦国ヲ済フ。故ニ知り又、引導ハ二ツナレドモ、得悟ハ惟一ツナルコトヲ」(割注省略)と述べている。ここには道教への言及はないが、憶良の思惟に道教的な要素が深く投影していることは、これと一連のものとして連作された『沈痾自哀文』において、儒と道の入習合Vの立場をとることからも確認できるであろう。憶良における入三教V観の問題は、福永光司氏が指摘されたように空海の『三教指帰』との比較を通じてより明確になると思われるが、(空海における漢文の学)『日本の名著 最澄・空海』解説、一九七七年 中央公論社)、このことについては稿を改めて考察したいと思う。

(一九八五年 六月成稿)

#### △附記▽

本稿は、一九八五年六月、上代文学会例会(於早稲田大学)での口頭報告をもとに成稿したものである。発表の席上、貴重な御意見をいただいた辰巳正明・中西進先生、『老君恩重經』の訓読について御教示下さった中国宗教学史の丸山宏氏、ならびに道教文化研究会の諸氏に深く感謝申し上げる次第である。

『太上老君說報父母恩重經』抄

① 爾時太上老君於西那玉國鬱利山中敷暢道德宣闡科戒，為十方說因緣事。於時隨從五萬人俱往彼處，恭奉遭筵金擊拳，叉手禮諸尊顏。聞訊既周，是時衆中有一真人名曰海空，智感出班，長跪白太上曰：臣等稟受髮膚，皆因父母。父母恩深，無由報効。惟願大慈愍傷，一切如蒙啓訓，生死荷恩。

② 爾時太上憫然，良久告海空智感言：善哉善哉。子之所問，要乎深矣。子可諦聽，當為解說。夫形直者，其影必正；形不直者，其影必斜。其聲清者，其響必淨；聲不清者，其響必濁。孝與不孝，其義如是。若孝悌者，一家之中，老少安樂；天人欽仰，神明守護。子孫相承，孝慈不斷，招感孝順，以為其子。若不孝者，世世相繼，一門之內，總是冤家。雖為父子，甚於讎敵。招五逆以為其兒，父子兄弟各財異食，同園別菜，共田分穀，隱藏珍饈，餓食如餓。雖是人形，不如禽獸。神明不佑，天下輕欺。一生所為，諸不吉利，死入地獄。一切苦罪，畢受報。為百勞鳥，生子能飛，共食其母。百劫之後，託生人中，聚集五逆，諸不孝緣，共為父子，更相殘害。死生憂苦，輪轉無窮。天下苦痛，莫過於此。

③ 夫人生世，父母為親，非父不生，非母不養。是以天地覆覆，寄託母胎，氣識相凝，懷娠十月，繫妊胞重，坐臥失常。歲滿月充，誕育之候，其母恐怖，性命儼然。惻怛心神，憂喪產孕之日，內觸外觸，苦痛交切，失聲叫受。大苦惱，匍匐戰懼，骸骨驚嗟，及至生已，手摩其

頂，墮於草上，呱呱呼啼。安藏被褥，側身三月，常畏邪魔之所侵害。軌時須飯，非母不哺；渴時須飲，非母不乳。計飲母乳八斛，四升，十日提擲，遮蓋垢推乾，就嘔苦吐，甘非義，不親非母，不養，忽離欄，里官私急切，不得時，還即知我兒家中啼哭。母子天親，心性相感，分母百骸，而為面身，血相伝，而體無二。兒既憶母，母即心驚，馳步走，痛而乳湧，出還到門外，見子庭中，或在欄車，或房門際，或有人抱，或無人抱，或在牀上，或在地下，或時坐不淨，或時把泥，屎或尚啼哭，或啼哭欲止，拳眼見母啼笑，蹙眉搖頭，弄腦曳腹，而行嗚呼，嗚呼，哀向其母，母乃為兒屈身，下就長舒，而手拭除不淨，吹噓其口，以乳與之。舍孔看母，嚙其聲，母見兒喜，兒見母喜，二情思想，慈愛親重，情親相念，莫過於此。

④ 二歲三歲，弄意始行，寒熱屎尿，非母不悉。笑時懷喜，啼時知噴，唯飲食所余，無願父母行來，值他酒座，或得餅肉，不敢不食，懷挾持，掃向與其子，十回九回，恒常歡喜。一回不得，嬌聲伴啼，以此為常。孺生不孝，孝子不嬌，必有慈順，及年長大，朋友相隨，年生少壯，耽耽逸樂，梳頭摩髮，欲得好衣，棟擇精妍，持為其子，躑躅弊惡，父母自充，忽無衣，縵絳求，四遠傾心，南北逐子，東西橫轡，向頭為索，妻婦。

⑤ 情愛偏重，其母，軼疎私房之中，共相笑語。父母年老，氣力漸衰，終朝至暮，不來省問，獨守空房，猶如外

客。少女少食，飢凍切身，手脚胼胝，耳聾眼暗，床牀薄度，日如年身，既厄，贏多饑，蟻虱蚊蚋，蟻體，通夕不寢，長吟嘆息，何罪之有。生此不孝之子，柱杖巡喚，低頭下氣，欲伸所欠，未盡，前言其兒與，聲，顯目罵，誓回頭，却退扶壁，而掃，抱胸，自非，流動，目腫，連聲，唱苦，不如早亡。

⑥ 母告兒言：汝初小時，非吾不育，飲食，速蔽，非吾不養。懷汝十月，如携，重擔，氣息，奔喘，劇於走馳，或時寒熱，坐臥不安，腹皮，折裂，心胸，填滿，鬚落，消瘦，不能飲食。臨生產時，逆前一月，常懷憂怖，恐不相離，或有時安，或有時患，當生之日，命如風燭，四肢百脈，及以五藏，或如刀刺，或如鈎牽，或熱如火，或冷如水。此當解離，或死，或生，盡世間苦口，不能述。既得生，已喜懼交，集諸苦，諸痛，不可堪。忍三年，携抱，日夜不離，坐臥不淨，眠食失時，視兒，氣食，得息，飢渴，或有疾病，父母心痛，聞子，忍苦，母不能，倉心口，乾燥，萬種，求福，黃金，白銀，衣服，玩具，心念，子可無所，吝惜，念汝，小時，東西，隨我不離，寸步，食亦，隨我，眠亦，隨我，一日，無我，終日，不食，一夜，無我，啼哭，不眠，如何，長大，忽成，冤對，今雖有汝，不如，本無付之，於天，幽冥，當鑑，願我，早過，與你，相難，奈何，奈何（以下略）